

---

# 鬼 2題

朋次郎

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鬼 2題

### 【Zマーク】

Z99290

### 【作者名】

朋次郎

### 【あらすじ】

おにわんこひらとのなるほつへ

## その一　いづち山の鬼さん

「いづち山」というのがあります。

そこには昔から鬼さんが一人で住んでいました。

この鬼さんは怖い顔をしていますが性格はおとなしく、よい鬼でした。昔話に出てくるような、人間を食べたり怖がらせたりする鬼ではありませんでした。

それでも鬼さんは人間の田にふれないようにひつそりと暮らしていましたが、100年ほど前におくさんが死んでしまってからやがしくてなりません。

「ひとりでご飯を食べてもおいしくないよ。ひとりで散歩していくもおもしろくないよ」

山のてっぺんまでいくと、友達のかみなり鬼さんが時々話し相手になってくれます。

「ひとりではさみしからう、雲の家でいっしょにくらうよ」

かみなり鬼さんはそういうことをしてくれますが、いづち山の鬼さんは首をふります。

「いやいや、こっち山での思い出がたくさんある。だから、どんなにさみしきともいきはなれられないよ」

ある時、いづち山の鬼さんは冬に備えて木の実をたくさん集めていました。夢中で取っていたせいか普段近付かないふもと近くまでおりてきてしましました。

岩かげからそつと田をのぞかせていますといつまにか人間の家がたくさん建っています。ふもとぎりぎりまでぎっちらりと建つていたので鬼さんは田を丸くしました。

「おどろいたぞ、いづち山には鬼がいるといわれて、人間はわしをおそれて決して近寄らなかつたものじゃが、こんなに近くにまで暮らしてくれるようになつたのか」

そしてもう人間は自分をこわがらなくなつたのかもしれないと考えました。そうしたらひとりぼっちの自分にもたくさんの人間の友達ができるかもしれません。そう考えてみると、ふもとからかわいらしい声がしました。

「鬼さん、こちら、」

「鬼さん、こちら、」

「じどもの声でした。それも何人もいます。鬼さんはびっくりです。

「鬼さん、こちら、」

声のする方をそつとのぞいてみました。

小さなこどもたちが鬼ごっこで遊んでいました。

「鬼さん、こちら、手の鳴るほうへ！」

鬼の役のこどもがハンカチで田をおおっています。田隠したまま手を鳴らしている子をつかまえようと一生懸命でした。

「なんだ、鬼ごっこか、私を呼んでくれるなんて話がうまいと思つたよ」

それでも鬼さんはにこにこ顔です。

鬼ごっこで遊んでいたこどもたちがすくかわいかつたからです。実は鬼さんはこどもが大好きなのです。最後に人間のこどもを見たのはもう200年ほど前でした。もちろんそのこどもは鬼さんを見るなり怖がつて逃げてしましましたが。

だから、鬼さんはこどもを怖がらせないように木陰に立つてそつと見守っていました。久しぶりに見たこどもたちは着ている服の感じこそ違いましたが、楽しそうな笑顔や笑い声は何百年たつても変わらないと思いました。

「あれ、おじさんは鬼さん？」

小さなあどけない声がすぐうしろでしました。いつのまにかじどもがひとり、うしろにきていたのです。

他のじどもたちも鬼さんを見つけて集まつてきました。

「わあ、このツノはほんものなの？」

「わあ、鬼の玉玉つて大きいなあ！」

「わあ、木の実がたくさんある。これ、食べられるの？」

鬼さんは「じどもたちに囲まれてうれしくなりました。地面にすわつてツノや玉玉を自由にさわらせてやりました。」じどもたちも大喜びです。

それから鬼「じつ」をしてしました。

もちろん、鬼さんがずっと鬼の役です。

「鬼さん、」こちら、

「鬼さん、」こちら、

「手の鳴る方へ！」

楽しい鬼「じつ」がどのくらい続いたのでしょうか。

夕日が落ちてくると「じどもたちの親が迎えにきて、ひとり、ふたりと帰つていきました。迎えにきた親達も鬼さんを怖がりません。気持ち悪そうにじるじる見て、子供の手をひいて帰つていきました。

「さよなら、鬼さん、また遊ぼうね！」

「じどもがそう言つと、親は「じどもをしかります。

「浮浪者に口をきいてはいけません」

「鬼のお面をつけて、「じどもの気を引いて気持ちが悪い人だ」とおとなは鬼さんを見てもだれも本物とは思わないのです。

鬼さんも「浮浪者」という意味はわかりませんでしたが誰も自分を怖がらなくなつたので時代が変わったんだ、と思いました。それはうれしいことなのか、よくわかりませんでした。

ただ、これからは時々ふもと近くまで下りてきたら「じどもたちと一緒に遊べるなあ、」と考えました。

次の日も鬼さんは「じどもたちと遊ぼうとふもと近くの公園までおりました。」じどもたちの喜びやつた木のおもちゃも作つてきました。

「あ、きのうの鬼さんだ」

さつそく田ぞとく見つけられて鬼さんはうれしくなりました。

「やうじや、わじじや。あ、みんな、わしと楽しく遊ぼうな

そういうなり厳しい声がしました。

「その人と遊んではいけません！」

鬼さんが振り向くと何人かの大人がこっちをにらんでいます。

「あんた、よそへ行つてくれ。環境が悪くなる」

鬼さんは困りました。

「いや、遊ぶだけですが」

大人の人間は鬼さんを軽蔑したような顔で言いました。

「鬼の恰好で、鬼こつこか。いい大人のくせにバカなやつだな」

「いや、わしは本物の鬼ですよ」

「うそおっしゃい、お面を取りなさい」

ひとりが近づいて鬼さんの顔にさわりました。

「うわっ」

その人はちょっとさわっただけで手をひっこめました。こどもたちはおかしそうに見ていました。鬼さんもおかしくなつてわはは、と笑いました。

その人は怒った顔で言いました。

「お面に継ぎ目がない。よくできていることだ。でも、この世に鬼なんかいませんからね。こどもたちを惑わすようなことはしないでください」

「わしは悪いことはしない鬼だから、そんなことはしないよ」

大人達は鬼さんを指さして、ちょっと頭がおかしいのだ、と言い合いました。鬼さんは自分を怖がらなくなつた人間をからかつてやろうとしました。

「じゃあ、わしが本物の鬼だということを教えてやりましょう」

大人達も言い返しました。

「それじゃあ、やつてもらいましょうかね」

その瞬間です。鬼さんは持ってきたこじものおもちゃを空中に浮かべました。

「どうですか、人間にはできないでしょ？」

「子どもたちは喜んで拍手をしました。大人達も手品がお上手ですねと軽蔑しながらほめました。

「いや、手品なんかじゃない、それならこれはどうかいな」

鬼さんは一番小さい女の子を抱っこして空中に浮かせました。女の子は空が飛べるようになつて大喜びです。両腕を鳥の羽のように羽ばたかせて公園のまわりを一周しました。

軽蔑顔の大人達もこれにはびっくりしました。鬼さんをちょっと見なおしたようです。

「やあ、あんたは本物の手品師だな、これはすごいですね」

「おやおや、まだ信じてくれないのですね」

鬼さんはすっかりおもしろくなつてきました。自分が恐れられたところは人間はすっかり変わつてしまつたのです。人間が持つていない力を見せてやろうとしました。

大人のひとりが好奇心いっぱいな様子で頼みました。

「じゃあ、私達もあの女の子のように飛べるようにしてください」「いいとも！」

鬼さんは大きな手のひらをぐるんと輪をかけて振り回しました。すると、

公園にいた鬼さんも大人達もこどもイヌもネコも、みんな、みんな、空を飛べるようになつたのです！

わあい、わあい！

人間は大人もこどもたちも大喜びしました。

わあい、わあい！

空が飛べる！

空を飛べるよ！

鬼さんも空を飛びながら山を案内しました。

実は空を飛ぶのも100年ぶりでした。人間に見つかるといけ

ないので飛べないふりをしていたのです。山の上を飛んでいると今更ながら人間の家が際限もなく増え、人間の数も増えているのがわかつて驚きました。

やがて飛びつかれると、みんなを山のてっぺんにある自分の家に案内しました。そして山から採れた木の実や川魚を「じゅそつしました。

「おいしい、おいしい」

「おいしかろう、たくさん食べててくれやあ、」

鬼さんは冬のために大事に取つておいた食べ物まで出して「じゅそつしましてやりました。

やがて人間達をふもとまで見送り家に帰ると、さすがに疲れました。それでも心がほっこりあつたまつでぐっすり眠れました。日覚めると布団の横で友達のかみなり鬼さんが厳しい顔でにらんでいました。

「おい、おまえ。人間と仲良くしていただな。わしは空の雲の上からちゃんと見ていたぞ。その上空まで飛ばそつなんて、なんてことしゃがる」

「人間はわしらを怖がらなくなつた。だから仲良くしよう、喜ばせてやろうと思つたんだが」

「もうこれきりにしたほうがいいぞ。神様に怒られるぞ」

かみなり鬼さんは忠告しましたがこつち山の鬼さんは首を振りました。

そして毎日ふもとまでおりてこどもたちと鬼「じゅそつ」をして遊びました。

ある日いつものように遊んでいると大きな雲が公園に下りてきました。公園は霧に包まれたように真っ白になつて何も見えなくなりました。鬼さんはこどもたちをこつちにおいてとかばいました。この雲はかみなり鬼さんの雲だとわかつていてからです。

「おうい、かみなり鬼さんだらつ、遊びにきたのかやあ」

「いや、違うよ。神様に見つかつたんだ。おれはお前をこつち山

におかず雲の家に連れていくよつに言いつけられて迎えにきたんだ

「行きたくないよう、ここにこどもたちと遊びたいよつ」

「じゃあ、神様にそつ言えよ、まあ、この雲に乗れよ、とにかく神様のところへ行こつ」

「ひとつ山の鬼さんはかみなり鬼さんに連れられて神様のところへ行きました。

神様の雲は空の上の一番上の位置にあつて鬼さん達も来たことがありません。大きな門のどびらを開けて神様に会いました。

神様は白いひげをなでながら、ひとつ山の鬼さんに言いました。

「鬼さんだめだよ。人間を空に飛ばしたり。人間には人間の能カがある。これはしてはいけないことだつたんだよ」

鬼さんは素直にあやまりました。神様は言いました。

「そんなにヒマならこじで働きなさい。するこどがたくさんあるから」

鬼さんは首をふりました。

「わしは人間のこどもたちがかわいいのです。どうかこのままひとつ山で暮らさせてください。もう人間を空に飛ばしたりはしませんから。許してください」

「鬼の姿のままでこどもたちと遊ぶのかね？鬼と人間は違うよ。鬼はもう絶滅しかかつている人種だ。公園で人間と遊ぶくらいならここで働いてもう一回結婚しなさい。女の鬼を紹介してあげるから。こどもができるたらそのこと遊べばいいだろう」

「ひとつ山の鬼さんは前の奥さんが忘れられないでの断りました。

神様は機嫌が悪くなりました。

「じゃあ、好きなようにしなさい。ただ鬼が人間と一緒にいるのは喜ばしくない。だから、そのツノとキバをここに置いていきなさい」

鬼さんは素直に大事なツノとキバを神様に渡しました。そのとたん鬼としての神通力がなくなりました。

「うち山の鬼さんはツノとキバがないとただ目と身体が大きいだけのおじいさんのようでした。人間を空に飛ばしたりできなくなりましたがこどもたちはそれでも鬼さんが大好きでした。鬼さんは毎日公園に行ってこどもたちを遊びました。

そのうちに塾やおけいこ事に通う子供が増えて、公園に来ても誰も来ない日が続きました。鬼さんはまたさびしくなつてふもとにあらあちこちの公園を渡り歩きました。

「鬼さん、こちら、鬼さん、こちら、手の鳴る方へ！」  
どこへ行つてもこんな歌ももう聞けません。

やがて、鬼さんはこっち山にまた戻つてきました。そして神様から鬼のツノとキバを返してもらい、天の雲の国へと引っ越しをしたのです。

## その2 鬼のおまつり

ぼくの名前は「こちる」です。ぼくのママは鬼です。でもそれは、変身した時のことです。普段は人間とかわりません。パパは普通の人間です。だから、ぼくは鬼と人間のあいのこです。

ママが鬼だということがわかったのは、きのうのぼくの誕生日です。7歳になつたというのでママはぼくに小さな箱をくれました。木で作られていていいにおいがします。ヒノキという木のにおいだそうです。喜んで開けてみるとその中にはツノとキバが入っていました。小さな赤い布に糸で結わえられていて何かの骨格標本のよう見えました。

「鬼のツノ・キバ詰め合わせセットです。ご先祖様の形見だから大事にしなさいね」

「これ・・・どうやつてつかうの?」

「普段は誰にも見つからないうように押入れか机の奥に入れときなさい」

「うん・・・」

「もうすぐ鬼のおまつりがあるからその時に使い方を教えてあげる。パパには内緒ですよ」

「うん、わかった」

ママはパパの前では普通の人間として暮らしているのでした。ぼくも鬼の血が入っていたなんてびっくりしました。ママが鬼らしいところはちつともありません。

ぼくは押し入れにそれを放り込んだまま新しいゲームに熱中していました。そしてそのまま忘れてしました。

やがて鬼のおまつりに行くことになりました。招待状がきたそうです。パパは出張で留守でした。

「前にあげたツノとキバのセットを忘れずに持つて行きましょう。

おじいちゃんとおばあちゃんも、あなたに会えるのを楽しみにしているよ」

「ぼくはお父さんの方のおじいちゃん、おばあちゃんしか知らないからつたので後一人いるなんてびっくりしました。」

鬼のお祭りは車で30分くらいのところにありました。縁日の屋台がいっぱいでいてござやかでした。ぼくの友達も来ていて立ち話もしました。

「ねえママ、これって普通の人間のおまつりじゃん・・・、鬼のおまつりといつても人間がするおまつりだろ?」

「いいえ、それは見かけだけ。本当の鬼祭りもあるのよ」

ママはぼくの手をひいて神社の神殿の奥に連れて行きました。もちろんここにくるのははじめてです。きょうはこの地方の住民を苦しめた鬼を退治した記念の日だそうです。鬼退治の記念日が鬼のおまつりだって。んん・・・なのに、どうして鬼が神社の奥にいるのだろうか。神殿には案内的人は誰もいないのにママはずんずん奥へすすむ。どんどんの部屋までいくともう壁のござわいや人のざわめきも聞こえなくなってしまいました。

ママはバッグから鬼のツノとキバをつけました。するとずいぶんと鬼らしくなりました。いつも普段着のままのブラウスとスカート姿の鬼です。

「さあ、あんたもママのまねをしなさい」

だから、ぼくもママのまねをした。ツノを取り出して頭につけるとくつついた。キバも歯につけるとぴたりとくつついた。それらは吸いついたまま取れなくなつた。

「ママ、取れないよ!」

「それでいいのです。すぐに取れるようなツノとキバのセットなんか安物です」

ぼくたちはこの格好で部屋の奥に行きました。部屋にはすでに何

人かいましたがみんな鬼のツノとキバをつけていました。でもそれがなければ普通の人間と変わりません。

「ほんにちは、おや、今年は子どもさんを連れてきたのかね」

「はい、このこどりては初めてのお参りです」

「やあやあぼうや。そのツノとキバ、すてきだね。よく似合つよ」  
おじちゃん鬼がぼくのツノをなでてくれた。ぼくのつのはママと同じ2本だがそのおじちゃんは一本だけででもぼくのよりずっと大きいツノだつた。ぼくは何と言つてよいかわからないので黙つていました。

床の間には本物の鬼が2人座っていました。絵本の挿し絵でよく見かけるとおりの鬼だつた。真っ赤な大きな顔にもじやもじやの髪、大きなツノ、大きなキバ・・・。それがぼくのおじいさん鬼とおばあさん鬼だつた。ママはぼくを床の間に上がらせてその鬼達に丁寧にあいさつさせた。

「ほんにちは、おじいちゃん。おばあちゃん。おひせしふりです。この子がわたしのこどもでいらっしゃります。どうぞよろしくお願いします」

「おお、おまえがいちろうつか。よくきたな。わしらはおまえのおじいちゃんとおばあちゃんだよ。鬼のしるしを身につけるまでに大きくなつたか。よかつたなあ。いい子になつたなあ」

鬼達はぼくを見てにこにこ笑いぼくの頭を何度もなでてくれた。

「さあ、今日はお供えをいただいたし、おいしいものをたんとおあがり」

ぼくはママや他の鬼達と一緒においしいものをたくさん食べた。

それから神社の巫女さんの踊りと祝詞を聞いた。

やがておじいさん鬼とおばあさん鬼が床の間からおりて部屋を出た。ぼくたちはぞろぞろあとをついて行つた。神社の奥の庭のちいさなおやしろの前に出る。その前にでたままおじいさん鬼とおばあさん鬼は小さく身体を丸めた。すると光る玉になつておやしろの中

へすうつと消えていった。その瞬間巫女さんが厳重に鍵をかけた。

ママや他の鬼達はさみしそうな顔をして見送った。ぼくのツノとキバは鍵をかけられた瞬間にぽろりと取れてしまった。ママのツノとキバもそうだ。他の鬼達もそうだった。

ママは丁寧にツノとキバを箱にしまいながら言つた。

「今度会えるのは7年後です。それまでいい子にしようね」

ママは家に帰るところ話してくれた。

「昔話の鬼退治で、鬼は人間に負けました。それからは子孫の私達も人間のふりをしなければならないのです」

「鬼のツノとキバは鬼の証明になるので一生、大事に持っているのですよ・・・」

「それは7年に1回のお祭りにしか役に立たないけど、病気になつたらこのツノを少し削つて飲めば人間のように病院に行かなくてもなおります。それから・・・この話はパパやお友達の誰にも話してはいけませんよ」

ぼくはママに質問しました。

「ねえ、ママ。もし秘密をばらしたらどうなるの？」

「誰も信じませんよ、鬼の存在すら信じてもらえないでしょう」

「・・・鬼つていいものかな？普通の人間とどう違うのかな」

「違ひなんかないけれど、人間だつていろんな人種がいるでしょう。私達は絶滅しかかっている動物と一緒にです。ツノとキバのセットももうありません。みんなこわされたり、なくしたりしたからね」  
ぼくは箱をしっかりと持つた。そしてこのセットを大事にしよう

と思いました。

おわり。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9929o/>

---

鬼 2題

2010年11月20日17時25分発行